第２回

薬草だより

当に我が家に帰るべし…

樋口 剛央*

生薬名：トウキ（当帰）
薬用となるトウキの基原植物：
・第十六改正 日本薬局方（2011 年）
Angelica acutiloba Kitagawa 又は
A. acutiloba Kitagawa *var. sugiyamae* Hikino
（セリ科）
薬用部位：根

トウキは日本各地で自生しており、薬用植物として各地で栽培される多年性草本です。全草に「漢方の匂い」と言われる独特で特異な甘い芳香があり、株高 40 ～ 90cm。花は直径 20cm 程の複散形花序で多数の白色の小花からなります。夏の陽射しに眩しいほどの白さです。（写真 2）

「当帰」の名にまつわる昔話に『婦人病を患った女性にその夫が寄りつかなくなった。思いあまった女性は人に教えられた薬草の根を煎じ、「恋しい夫よ、当に我が家へ帰るべし」と祈りながら毎日飲んでみたところ、やがて病は回復し艶っぽい女盛りを取り戻し、夫が惚れ直し帰ってきた。その薬草がトウキであり、故に当帰と名付けられた』とあります。トウキはこの話にあるように婦人病には重要な生薬です。

当帰芍薬散、四物湯、加味逍遙散などの婦人薬を中心に、補中益気湯、七物降下湯など、多数の漢方処方に使用されるトウキの日本国内の年間使用数量は約 600 トンで、使用生薬 250 品目中第 8 位の使用量です。国内の年間生産量はそのうちの約 200 トンです。現在の日本のトウキの栽培地は主に奈良県と北海道で、それぞれ大深当帰、北海当帰として流通しています。栽培期間は 2 年、繁殖は実生法で 1 年目の 3 ～ 5 月に播種、2 年目は 3 ～ 5 月に定植し、同年 10 ～ 11 月に収穫します。栽培のポイントは、2 年目の夏期に花が咲き結実した株は枯死するので、開花しないような苗の定植時期の設定と適度な大きさの苗の選抜（写真 3）に注意を要します。

写真 1 は 2011 年に行った北海道栽培地調査記録です。写真にあるように北海道では栽培面積が 1ha 以上の大規模圃場は珍しくありません。

秋の収穫時期には、大量のトウキが加工場へ一気に搬入されてきますので、加工調整作業はまさに夜通しの作業となります。トウキの調整作業は、搬入 ⇒ 土砂の除去 ⇒ 乾燥で、その作業は収穫が完了するまで途切れなく続きます。太く大きな根であるため、農家の多大な時間と労力を費やして、ようやく良質な生薬トウキが完成します。

北海道のトウキ栽培地（夕張郡：2011年6月）

写真1. トウキ栽培風景
写真右半分がトウキ、左半分はセンキュウ

写真2. トウキ開花株
種子採り用

写真3. トウキ定植後の苗

＊松浦薬業株式会社